

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

《理工農系》

●神戸大学システム情報学研究科計算科学専攻、工学研究科

「大学連合による計算科学の最先端人材育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本大学院 GP プログラムは、4 大学が連合して実施したもので、それぞれの大学での単位認定を試みた。しかしながら、それぞれの大学の事情や、それぞれの大学のカリキュラムとの整合性などから 4 大学すべてでの単位認定には至らなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

一週間のシミュレーションスクールで単位認定を試みたが、シミュレーションスクールの講義内容、開講時期から参加学生の単位認定は 1 大学だけで、他の大学では単位認定ができなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

今後は、複数の講義やコースを用意し、大学で自由に選択可能にすることが重要と考える。このように複数の大学共通の授業やコースを設定するためには、全国の大学で共同に教育する制度、機構が必要と考える。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

④ICT 技術を利用した遠隔教育の推進

《理工農系》

●神戸大学システム情報学研究科計算科学専攻、工学研究科

「大学連合による計算科学の最先端人材育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

4大学による共同で計算科学の教育を実施するために、TV会議システムやe-Learning システムの有効活用を試みた。TV会議システムによる講義では、離れた受講生の集中力の持続や、e-Learning の自主的な利用への促進が課題であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

TV会議システムやe-Learning システムを利用した教育の知識が不足していたため、具体的な工夫に欠けていた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

TV会議システムやe-Learning システムなどをすでに活用している大学から、利用法などの修得が重要と考え、現在、情報の収集は図っている。また、TV会議システムやe-Learning システムなどの経験を積むことも大切と考え、新たな講義の開講を準備している。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

《理工農系》

●神戸大学システム情報学研究科計算科学専攻、工学研究科

「大学連合による計算科学の最先端人材育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

講義、演習において、受講生のレベルに幅があったため、画一的なカリキュラムでは対応ができなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

計算科学は、あらゆる研究分野でそれぞれ研究が進められているため、研究分野の異なる学生間では修得している知識やプログラミング技術に大きな開きがある。同一レベルの学生を集めることが困難であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

講義・演習の前に事前調査を行いクラス別けを試みたが、受講生の数が限られていたことから、本大学院 GP の実施期間中には有効的な手立てを講じることはできなかった。現在は、講義・演習を初級から上級まですべて連続的に実施して、受講生のレベルに合った段階から受講を開始する方法を採用している。